

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520592

研究課題名(和文) 中世系図論に基づく系譜史料の体系的研究

研究課題名(英文) Research on Genealogy in Japanese Medieval History

研究代表者

白根 靖大 (SHIRANE YASUHIRO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80250653

研究成果の概要(和文)：本研究は、系図それ自体から当時の社会や時代の特性を解読する中世系図論に基づいて、東北地方に現存する系譜史料を対象に、作成の時期・主体・目的や、保有・相伝された背景等を考証し、系譜史料の果たした歴史的役割を明らかにした。たとえば、訴訟の証拠文書として作成された系図が、その役割を終えた後、新たな系図作成の資料とされるなど、その時々に応じた役割を果たしながら相伝された例がある。こうした事例研究の蓄積が、中世系図論の進展につながる。

研究成果の概要(英文)：This research aims to advance genealogy in Japanese medieval history. Concretely I analyze the genealogical charts in the Tohoku District, and I investigate the question when and why they were drawn up, who drew up them, and so on. For example, a genealogical chart was drawn up as one of documentary evidences in the 14th century. Later it became the source for a new genealogical chart. I reach the conclusion that the genealogical charts had different significance according to the occasion.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史・中世系図論・系譜史料・系図

1. 研究開始当初の背景

(1)系図研究において

系図研究において、系図それ自体から系図作成時の社会や時代の特性を解読しようという新しい研究視角が提唱された。これは、系図の信憑性を追求するのを主目的とする従来型の系図研究から脱却しようとする研究動向である。

近年、中世系図論では、こうした研究視角から系譜史料を真正面に据えた個別事例研

究が行われるようになり、中でも中世武家系図に関して系図作成・相伝の時期的特色や歴史的背景などが明らかにされてきている。次なる段階としては、個別事例研究の体系化が課題となる。

本研究は、以上のような中世系図論の研究動向に立脚している。

(2)東北中世史研究において

東北中世史研究は、史料の残存状況が厳し

い中、史料的限界を抱えながら進められてきた。その克服のために、考古学の成果を活用する研究が盛んになってきており、文献史学においても新たな材料となる史料の発掘が求められる。

その具体例として系譜史料を挙げることができるが、そうした研究はまだ一部に過ぎない。東北地方に現存する系譜史料を史料学的に考証することは、東北中世史研究の進展にもつながる。

本研究はそのためのものでもある。

2. 研究の目的

(1) 中世古系図の史料学的研究

系譜史料を史料学的に考証し、その史料的価値を高めることによって、中世古系図を中世史研究において活用できる素材とする。ここでいう系譜史料とは、系図のほかに、文章で記されるもの（由緒書や家記、系図編纂関連史料等）も含んでいる。系図は視覚的な表現手段でもあり、文字情報以外にも読み取れる情報があるという特性を持っている。本研究では、とくに中世古系図の史料的価値を高めることを主眼とする。

(2) 東北地方に現存する系譜史料の発掘

東北地方に現存する系譜史料に着目し、東北中世史研究において活用できる系譜史料を発掘する。具体的には、秋田・山形両県（出羽国）に現存する系譜史料を対象とする。

その理由は、中世系図論においても東北中世史研究においても、両県（出羽国）は相対的に研究の遅れが否めない地域だからである。

(3) 中世系図論の体系化へ向けた議論

中世古系図の個別事例研究を積み重ね、中世系図論の新たな体系化を目指すための議論を提起する。たとえば、系図作成の事情と系図相伝の背景などを追究し、系譜史料の果たした歴史的役割について長期的視座から考証することなどが挙げられる。

3. 研究の方法

(1) 史料調査および収集

秋田県および山形県に現存する系譜史料を対象に、原本調査をしたうえで写真撮影という手段で史料収集を行う。主に、秋田県では秋田県公文書館、山形県では山形大学附属図書館を訪れる。

その理由は、両機関は様々な種類の系譜史料を所蔵しており、収録範囲の異なる系図（家系図・一流系図・氏系図等）を収集できるからである。

(2) 史料の翻刻

系図は視覚的な表現手段でもあるので、原

本に忠実な形で翻刻する。対象とする系図の中には、すでに翻刻されているものもあるが、そのほとんどは刊行された図書のページに合わせた形に変えられている。

系図の原形を復元することは、文字情報以外にも読み取れる情報があるという、系図の特性を復元する点に大きな意味がある。

(3) 史料の分析と考察

系図の原形を復元し、作成時期や作成主体を確定し、当時の歴史的背景を踏まえながら作成目的を明らかにする。さらに、系図が相伝された実態を追い、系図を保有する歴史的意義について考察する。

(4) 体系化を目指す議論の提起

系図作成あるいは相伝の時期的特色や歴史的背景などについて、共通点や相違点を見出し、個別事例を総括する。また、個々の系図の史料的性格に注目し、系図が果たした歴史的役割について、長期的視座に立った議論を提起する。

4. 研究成果

(1) 秋田県における調査・収集・分析

① 調査・収集

秋田県公文書館を訪れ、所蔵史料の原本調査を行い、以下の系譜史料を抽出した。具体的には、A「北酒出本源氏系図」B「酒出本古本佐竹系図」C「宇留野本佐竹系図」D「小瀬本佐竹系図」E「清音寺本佐竹并諸家系図」F「正宗寺本佐竹并諸家系図」G「引証佐竹世系大成附分流系」H「佐竹系図略 中院家到来系図正誤」I「佐竹御系図引用諸系譜書籍」J「元禄家伝文書所収系譜史料」である。

これらの系譜史料を写真撮影し、史料収集を行った。

② 分析

Aは、清和源氏諸流を記したもので、書き継ぎがある。原系図の成立は鎌倉後期までさかのぼる可能性があるが、現存の系図は、室町中期ころの写しに書き継ぎが加えられていったものである。書き継ぎを行った一人として、室町幕府の奉公衆だった美濃佐竹氏の光家があり、村上源氏の中院通秀が署判を加えている。彼らは文明年間ころの人物である。

B C Dは、いずれも佐竹氏の系図で、佐竹氏の庶流である酒出・宇留野・小瀬の各家に伝来した。いずれも戦国期の天文年間に写されたもので、Bには朱書の書き込みが加えられており、Cは前欠と見られる。

E F Gは、近世に編纂された佐竹氏関係の系図集である。Eは清音寺、Fは正宗寺に伝来したもので、Gは近世秋田藩の木村松軒によって編纂された。Gには編纂のもととなった系図類の記載があり、中世にさかのぼって

系図の原形を復元するための素材となる。

Hは、「佐竹系図」に関して中院氏からの教示を受けたことを示す近世史料である。近世秋田藩の中村光得によるもので、彼は秋田藩の系図編纂事業に携わった人物である。佐竹氏と中院氏とのつながりは、Aからわかるように、中世にさかのぼる。

Iは、近世秋田藩において「佐竹系図」を編纂する際に、引用・参照した諸系譜および書籍を記したものである。中世にさかのぼる典拠を見出すための史料となる。

Jは、近世の元禄年間、秋田藩に提出された家伝文書に所収されている系譜史料で、系図・由緒書などである。その中から、中世にさかのぼると出羽国の在地勢力だった氏族（関口氏・松岡氏・六郷氏等）を抽出した。このうち、戦国時代に小野寺氏家臣だった氏族については、小野寺氏勢力下の当時の状況を物語る史料として注目できる。

(2) 山形県における調査・収集・分析

① 調査・収集

山形大学附属図書館を訪れ、所蔵史料の中から以下の系譜史料を抽出したうえで、原本調査を行った。具体的には、a「桓武平氏諸流系図」b「中条氏系図」c「三浦和田氏系図」d「和田氏系図」e「中条・羽黒氏系図」である。いずれも「中条家文書」に所収されている。

これらの史料について、画像ファイルを手し、史料収集を行った。

② 分析

aは、桓武平氏諸流を記したもので、書き継ぎがある。原系図の成立は鎌倉時代の建長年間までさかのぼり、鎌倉幕府得宗家あるいはその周辺によって作成された。鎌倉後期に三浦和田氏が入手し、その子孫に伝来したものである。没落していた同氏が復権を果たす過程で、自らの出自を明示するために保有したと考えられる。現存の系図は、鎌倉末～南北朝期の写しに書き継ぎが加えられていったもので、記載は近世にまで及ぶ。

bは、三浦氏の流れを記したもので、書き継ぎがある。原系図の成立は室町中・後期で、三浦和田氏の子孫である中条氏によって作成された。中条氏が三浦氏の流れを汲む氏族であることを明示する意図があったと考えられる。書き継ぎにはaとの共通点が看取でき、記載は近世にまで及ぶ。中条氏にとって、aと並列するべき位置づけの系図だったと見られる。

cは、三浦和田氏の系図で、追筆が一箇所あるものの、作成時の原形をとどめている。成立は南北朝期の貞和～文和年間で、三浦和田茂助が作成主体と考えられる。もともとこの系図は、訴訟において、所領（地頭職）の

領有権を代々相伝してきたことを示すために作成され、室町幕府に証拠文書の一つとして提出されたものである。のちに、当該訴訟の証拠文書群から切り離され、系図作成の際の根拠史料として使われたと見られる。その一つがbで、注記に共通点が散見される。

dは、和田氏の系図で、断簡である。全体像は不明だが、南北朝～室町前期に記された可能性が高い。

eは、中条氏と羽黒氏を中心に記した系図で、縦に長く記される縦系図である。室町後期に作成されたと見られる。中条氏と羽黒氏は三浦和田氏から分かれた同族で、その過程を簡潔に記し、両氏の関係性を示すのがねらいだったと考えられる。

(3) 宮城県における調査

東北地方に現存する系譜史料の中で、比較対象となり得る事例として、仙台市博物館に所蔵されている「伊達家文書」の原本調査を行った。本研究は出羽国を対象地域としており、同じ東北地方である陸奥国の現状を把握するためである。

今回の調査は予備的なもので、史料群における系譜史料の残り方を確認することが主眼である。その結果、系譜史料の保存状態が良好なこと、系譜史料と関連文書のまとまりが崩されずに保管されていること、近世史料が多いものの中世にさかのぼる復元が可能であることなどを検証できた。

これは、系譜史料の作成もしくは相伝の歴史的背景を探るための関連史料が残されていることを意味する。今後の展望が広がる史料群を発掘できた。

(4) 東北中世史研究における系図研究の現状調査

東北中世史研究会において開催されたシンポジウムに参加し、東北中世史研究における最新の系図研究を調査した。具体的には、「遠野南部家文書」所収系図に関する研究報告に注目し、その成果を吸収するとともに意見交換を行った。

研究報告によると、「遠野南部家文書」には、作成時期も内容も異なる複数の系図があり、系図作成に関連する史料が豊富に存在するという。これに対し、本研究が対象とする秋田県公文書館所蔵系譜史料の現状についての研究成果を述べ、今後比較検討を進める有効性を確認した。

(5) 史料の翻刻

調査・収集した系譜史料を原本に忠実な形で翻刻した。すでに刊行されている系図の中には、原形を変えられているものが存在することを確認するとともに、文字の誤読や位置のズレ、あるいは罫線のつながりが誤っている

事例などを発見した。

(6) 考察

系図は、収録範囲の違いから、家系図・一流系図・氏系図に分類することができる。秋田県公文書館所蔵系図および山形大学附属図書館所蔵系図には、こうした系図が含まれており、比較考察できる研究対象である。以下、かかる観点からの考察を述べる。

①秋田県公文書館所蔵系図

前掲の分類によれば、Cは佐竹氏を記した家系図、BDは佐竹氏と庶流の酒出・小瀬氏の関係性をそれぞれ記した佐竹一流系図、Aは清和源氏を記した氏系図となる。

このうち、BCDは同じ天文年間に写されたものだが、佐竹氏が常陸国にいたこととあり、その歴史的背景は戦国期常陸国の情勢を踏まえなければならない。Bについては、美濃佐竹氏（のち酒出氏）の基親が常陸国へ下向したことを契機と見る指摘があり、CDもあわせ、戦国期の常陸佐竹氏の研究と結びつく史料だと言える。

また、Aは、文明年間ころ美濃佐竹氏の手にあった系図だが、清和源氏の原系図は鎌倉後期までさかのぼる可能性があり、清和源氏の氏系図はすでに成立していたと見なせる。それは南北朝期成立の『尊卑分脈』の存在からも明らかで、こうした氏系図の淵源を探る素材として、Aは史料的价值が高い。

さらに、AとBは美濃佐竹氏（のち酒出氏）が相伝した収録範囲の異なる系図である。戦国大名佐竹氏の家臣となった酒出氏にとって、これらの系図は重要な意味を持っていたと思われる。すなわち、酒出氏が佐竹氏一流であり、佐竹氏が清和源氏一流であることを示すこれらの系図を、佐竹氏にもたらししたのは酒出氏である。このことが酒出氏の立場を支える一つの根拠になったと考えられる。このように系図を相伝する意味を見出すことができる。

②山形大学附属図書館所蔵系図

前掲の分類によれば、cが三浦和田氏一流系図、bが三浦氏一流系図、aが桓武平氏を記した氏系図となる。dは和田氏を記した家系図の可能性はあるが、断簡なので断定はできない。eは中条氏と羽黒氏の二家を記した家系図、もしくは中条氏と羽黒氏の関係性を記した三浦和田氏一流系図となろう。同じ一流系図に分類できるものでも、収録範囲に差があるのは、系図作成の目的が違ったためと考えられる。

たとえば、cは訴訟において証拠文書の一つとして作成された。その訴訟は所領（地頭職）の領有権をめぐるもので、係争地は三浦和田氏が代々相伝してきた場所である。こう

したことから、cは三浦和田氏という一族の範囲で構成された系図となった。

これに対し、bはcを根拠史料の1つとして作成された系図だが、三浦氏を祖とする同族も収録されており、同じ一流系図でも収録範囲が広い。bが作成された目的は、中条氏が三浦氏の流れを汲む氏族であることを明示するためである。

一方、aは鎌倉幕府得宗家あるいはその周辺によって作成された桓武平氏系図が原形で、三浦和田氏が復権を果たす際に、自らが得宗家と同じ氏（桓武平氏）であることを示すために入手した。ここに氏系図を保有する意味があった。そうした意味は鎌倉幕府滅亡によって失われたが、のちにaの中の三浦氏一流の部分が書き改められる時期が来る。その時期は、bの作成と関連させて考えることができる。

ところで、aとbには同筆の追記や書き継ぎが見られる。これは、aの中の三浦氏一流の部分が書き改められ、bが作成された以降に加えられた記述である。aとbに同じ追記や書き継ぎがなされたということは、これら二つが、中条氏にとって、代々相伝すべき系図と認識されていた証左である。だが、cにはその形跡がない。cは、歴史的な史料として保管すべき系図と扱われていた、と見なせるだろう。

こうしてみると、cは、訴訟の証拠文書として作成され、その役割を終えると、新たな系図作成の根拠史料として機能し、やがて歴史的史料として保管される系図と化した、という変遷をたどった系図であることが判明する。

以上のように、長期的視座に立つて系図の果たした役割を考察すると、時期や状況による系図の機能の差異や、複数の系図の関係性などが明らかになる。

(7) 総括

①東北地方に現存する系譜史料の発掘

秋田県公文書館所蔵系譜史料の中から10点（前掲A～J）、山形大学附属図書館所蔵系譜史料の中から5点（前掲a～e）を抽出し、調査・分析を行った。また、仙台市博物館所蔵系譜史料の中から、「伊達家文書」所収系譜史料の現状について調査した。

秋田県公文書館所蔵系譜史料については、東北中世史研究において活用できる系譜史料とともに、常陸地域の中世史研究に対して寄与できる系譜史料も現存することを指摘できる。また、山形大学附属図書館所蔵系譜史料については、中条氏の祖先が本拠としていた越後地域の中世史研究に対して寄与できる系譜史料でもあると言える。

今後、「遠野南部家文書」所収系図の研究成果との比較研究や、「伊達家文書」所収系

譜史料の分析結果を加えることによって、東北中世史研究における系図研究の進展につながる成果を展望できる。

②系譜史料の史料学的研究

研究対象とした系譜史料について、史料学的研究を行った。対象には、中世古系図のほか、近世に編纂された系図も含まれているが、原系図の復元を通して、中世古系図としての姿に迫ることができる。これらが作成・相伝された歴史的背景を踏まえることによって、今後、中世古系図を史料として活用していく道が拓ける。

各系図の考証結果は、中世系図論における個別事例研究の一つとして位置づけられるものである。

③中世系図論の体系化へ向けた議論

本研究では、二つの視座を組み合わせた議論を提起している。

一つは、系図の収録範囲の違いによる分類の導入という点である。具体的には、諸系図を家系図・一流系図・氏系図に分類し、各系図が作成・相伝された歴史的背景および収録範囲の異なる系図の関係性を問うことによって、系図が果たした歴史的役割を明らかにできる、という視座である。

もう一つは、系図作成の事情と系図相伝の背景などを長期的視座から考証することによって、系図を作成・相伝する歴史的意義を明らかにできる、という視座である。

これらの視座を組み合わせることによって、系図の史料的价值を議論するための研究視角が確立していくだろう。

また、こうした研究視角は、本研究が対象としている時代や地域に限らず援用できるものであり、系図研究全体を進展させる可能性をも有していると言えよう。今後、対象を広げてさらに展開していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①白根靖大、中条家文書所収系図の基礎的考察—「三浦和田氏系図」の作成とその歴史的背景—、東北史学会、2010年10月3日、山形大学

[図書] (計1件)

①白根靖大、高志書院、系図の中世史、刊行決定、230ページ予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白根 靖大 (SHIRANE YASUHIRO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80250653

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし